

勝利ではなく救いが伝えられる

ルカ 8:26～39 / 李正雨師

善と悪。私はこれがこの世のすべての物語のテーマであり、文学のモチーフになるものだと思います。そしてこの善と悪の戦いほど、人の興味と関心を引くことはないと思います。私たちが簡単に接している小説や映画やドラマが主にこのようなパターンを持っているというのは、善悪について人々の関心が深いという証拠です。ほとんどの人は、善の側に立ち、善が勝利を取めることを望みます。ついに善が勝ち、悪が減びるのを見ながら、痛快さを感じることもあります。このような二分法的な考えや仕組みは、聖書にもよく現れています。創世記から黙示録まで、善と悪が登場していない箇所はありません。皆様もよくご存知のように、創世記には天地の創造が書かれています。神様は善の神様であるため、神様が創造なさったすべてのものも善いものなのです。ところが、善に代表される神様の創造が終わった後、最初に登場するものは何でしょうか。ヘビです。創世記でのヘビは、悪を代表しているものです。そしてこのヘビは、神様の善い創造物を罪で染めさせます。これによって、罪の結果である死が神様の創造なさった世の中に入るようになります。

このように始まった善と悪の戦いは、聖書の最後の巻である黙示録まで続きます。聖書に登場するさまざまな状況や背景、時期や人物などはみんな異なりますが、結局は善と悪の戦いです。そして聖書は、いつも、最後まで善が勝つと語っています。今日の福音書にも、この善と悪の戦いが書かれています。聖書が語っている通り、善であるイエス様は悪を退けられ、戦いは簡単に終わります。しかし、今日の福音書が語っているのは、善の勝利だけではないと思います。イエス様はこの出来事を通して、勝利だけではなく、より大きいメッセージを私たちに示してください。これは、善の勝利による救いです。イエス様は、この救いのためにしばらくの間、ご自分が宣教していたガリラヤとユダヤから離れることになりました。今日の福音書の前の箇所である 22 節には、このように書かれています。「ある日のこと、イエスが弟子たちと一緒に舟に乗り、『湖の向こう岸に渡ろう』と言われたので、船出した。」

ここで湖の向こう岸は、今日の福音書 26 節に出てくるゲラサ人の地であり、この地はデカポリスという異邦の地域に属しています。ギリシャ語であるデカポリスのデカは、数字の 10、ポリスは都市を意味しま

す。帝国時代のギリシャは、この十の都市を植民地にしてデカポリスと呼び、ローマの時代になっても、その名前は変わりませんでした。皆様。悔い改める前の使徒パウロがクリスチャンを連行しに行ったダマスコという都市を覚えていますよね。ダマスコもこの十の都市の一つです。今日の福音書も、この十の都市の一つであるゲラサ、つまり異邦地域で起こったことです。もちろん、多くのユダヤ人たちがデカポリスに住んでいましたが、当時のエルサレムに住んでいたユダヤ人たちは、デカポリスのユダヤ人を同じユダヤ人として認めませんでした。つまり、当時のユダヤ人の観点から見ると、イエス様は異邦地域に行かれたのです。そしてイエス様は、デカポリスのゲラサで悪霊に取りつかれた人と出会われます。27 節の言

葉です。「イエスが陸に上がられると、この町の者で、悪霊に取りつかれている男がやって来た。この男は長い間、衣服を身に着けず、家に住まないで墓場を住まいとしていた。」

この言葉は、悪霊に取りつかれた人の状態がどうなっているかを教えています。何も身に着けず、墓場に住むほど、ひどく悪霊に取りつかれたということを 27 節は語っているのです。そして 29 節は、この人が

どのようにして墓場に住むようになったかを説明してくれます。鎖と足枷をはめられて監視されていまし

たが、これを切って荒れ野に行つたと書かれています。当時の人々は、荒野には悪霊が住んでいると思っていました。イエス様も洗礼を受けられた後、聖霊に導かれて荒野に行かれ、そこで悪魔に誘惑されたと聖書は語っています。そのため、彼が荒野に行つたというのは、もはや救済することができないほどになつたという意味だと思います。さらに、30節には彼が取りつかれた悪霊の名前が出てきます。悪霊の名前

は「レギオン」です。レギオンというのは、ローマ軍の軍団を意味するものとして、約6000人ほどの軍人

を指しているのです。言い換えれば、数多くの悪霊に彼は取りつかれていたということです。

6000という数も驚くべきことですが、当時のローマ軍についての人々の意識がどうだったかを一度考えてみてください。「不敗のローマ軍団」これがローマ軍についての人々の意識でした。イエス様の時代のローマ軍は、常備軍、すなわち訓練を受けた専門的な軍人でした。ユダヤ人も同様でしたが、ローマを除く他の国では、常備軍は多くありませんでした。ほとんど農業などの一般的な職業を持っていた人々が、戦争が起きたら武器を持って戦場に参加する形でした。ところが、ローマ軍は、専門的な訓練を受けた常備軍として構成されたため、非常に強い軍でした。そして、このような軍人が6000人も集まっていた軍団

は、大きな偉容をほこりました。ですから、今日の福音書の悪霊がレギオンだというのは、悪の力が大きいということを示すことだと思います。

しかし、このように大きな力を持っている悪霊レギオンも、イエス様の御前では、何の力も使えませんでした。自分を苦しめないでほしい、豚の中に入ることを許してほしいとイエス様に願うだけでした

(28、32節)。イエス様がこれを許すと、悪霊はその人から出てきて、豚の中に入りました。そして、豚の群れは崖を下って、湖になだれ込み、おぼれ死にました。イエス様が大きな悪との戦いに勝利なさつたのです。ところで、このことについて回りの人々の反応が不思議です。通常イエス様の奇跡の後には、イエス様についての感謝と賛美、または弟子になることが続きます。ところが、ゲラサの人々は、奇跡を起こされたイエス様を恐れます。そして、イエス様に自分たちの町を離れるように求めます。36～37節の言

葉です。「成り行きを見ていた人たちは、悪霊に取りつかれていた人の救われた次第を人々に知らせた。

そこで、ゲラサ地方の人々は皆、自分たちのところから出て行ってもらいたいと、イエスに願った。」

過去のペトロも、イエス様の奇跡を経験した後に、自分から離れることを願った人の一人でした。しか

し、ペトロとゲラサの人々の要求には、確かな違いがあります。ペトロは、ユダヤ教の信仰によって、罪人である自分は善いイエス様と合わないと思っていたので、イエス様が自分を離れることを求めたのです。しかし、ゲラサの人々の反応は、信仰によるものだと認められません。彼らは異邦の地域の人々だったからです。ただイエス様の奇跡だけを見て、イエス様の力を恐れ、自分たちのところから出て行ってもらいたいと願ったのです。これは、イエス様のことをどのように見るかについての違いだと思います。イエス様を単に権能の人、力を持っている人だと考えると、イエス様について恐れが生じるしかないでしょう。今でもそうですが、当時はすべてのことが力の論理だったからです。ギリシャ、ローマのような力強い国は、力のない国を支配し、すべてを所有しました。宗教もこの力の論理に従っていました。ギリシャやローマも皇帝を神の子だと称しました。戦争の英雄は神が自分の国のために遣わされた人として、戦争の勝利は自分たちが信じている神の助けとして認められていました。このような状況の中でゲラサも、力強い国々の支配を受けました。ギリシャによってデカポリスという名前で縛られ、続けてローマの支配を

受けました。そしてこのような力の論理は、ユダヤ人にも大きな影響を与えました。それでユダヤ人たちは、力強いメシアを期待し、イエス様の弟子たちも同じでした。イエス様の復活後から弟子たちがイエス様の言葉を理解し始めたということは、当時の状況をよく示してくれることだと思います。このような状況の中で、ゲラサで起きたイエス様の奇跡は、別の力として見られた可能性が高いと思います。誰も耐えられなかった人をあまりにも簡単に癒されたイエス様は、彼らにとって感謝の対象よりは、恐怖の対象になるしかなかったでしょう。だから人々は、驚くべき神的な奇跡に接しても恐れただけで、イエス様に自分のところから出て行ってもらいたいと願ったのだと思います。

かつてキリスト教が力の論理で優位を占めた時がありました。帝国を成し遂げたローマの国教として認められた後、教会は大きく成長し、政治的な力も持つようになりました。教皇の力が皇帝よりも強くなった時期もあったし、教職者たちは権力のために暗闘をしたこともありました。子供を産むと、教職者になることを願った親も結構いたので、教会の力と影響力がどんなに大きいのか、計り知れない時代でした。しかし、ある時代よりも教会は復興し、力を持っていましたが、人々は教会に平安ではなく恐れを感じていました。教会の裁きを恐れて洗礼を受け、自分の成功のために礼拝に出席して交わりました。力の論理では、教会が勝利者だったかもしれませんが、しかし、教会の中でイエス様の救いの意味などは、消え去ってしまいました。このような時代は、しばらく続いていましたが、この時代を教会の歴史では、暗黒の時代と言います。

力は福音の本質ではありません。ですから、最も多くの教会と信者を持っていた時代が暗黒の時代と呼ばれたのであり、レギオンを追い出したイエス様をゲラサの人々が受け入れられなかったのです。イエス様もこれをよくご存知であったと思います。それでイエス様は、出て行ってもらいたいという要求を受けられると、すぐに船にお乗りになります。すべてがゲラサの人々のためだったと思います。しかし、彼らをあきらめたわけではありませんでした。今日の福音書 38-39 節には、ゲラサの人々のためのイエス様の計

画が書かれています。イエス様が船に乗られると、悪霊どもを追い出してもらった人が、イエス様と共にいることを求めます。しかしイエス様は、彼を福音のメッセンジャーとして遣わされます。39 節の言葉で

す。「『自分の家に帰りなさい。そして、神があなたになさったことをことごとく話して聞かせなさい。』その人は立ち去り、イエスが自分にしてくださったことをことごとく町中に言い広めた。」イエス様は、ゲラサに力ではなく福音を伝えられました。

今日の福音書は、善と悪の霊的な戦いやイエス様の勝利を示すためだけに書かれたのではないと思います。イエス様は異邦の地域で悪霊に取りつかれた人の苦しみを知っておられ、ガリラヤから大分離れたゲラサに行かれ、彼を癒されました。そして、ゲラサの人々の心が慰められ、救われるために、彼をメッセンジャーとして遣わされました。皆に救いと平安が与えられること。これがイエス様が悪と対面なさった理由だと思います。そしてイエス様は、これのために勝たれました。イエス様の勝利は、救いのためだったのです。この救いの喜びが皆様と共にありますように。力は福音の本質ではないことを悟る私たちになりますように、主の御名によって祈ります。アーメン